

# 義太夫

## 「義太夫節三百年」を記念して

本年は、清水理太夫が竹本義太夫と改名して、大坂道頓堀に竹本座を始めてから、ちょうど三百年に当たる。言い換えれば、義太夫節三百年という意義ある年なのである。義太夫関係者一同は、このような記念すべき年にめぐり合わせたことを、心から喜ぶべきであろう。義太夫節二百年は明治十七年であったが、その年に名人豊澤団平は文楽座を脱退して産六座で旗挙げしたわけで、団平や越路(摂津大掾)たちは、分裂脱退など、身に振りかかる大騒動のために、静かに義太夫節二百年の歴史を振り返る余裕もなく、始祖初代義太夫に感謝するゆとりもなかったであろう。記念事業や祝賀行事をやったという記録は見

当たらない。

それと較べると、GNP世界第二位、長寿記録世界第一位になった日本、外国人が義太夫節を研究に来日する現在、そして何の紛争もない平和な義太夫界の今日、われわれには義太夫節三百年の歴史を振り返る余裕もあり、始祖への感謝を捧げる行事も、一致協力して行えるとは、誠に有り難いことであり、嬉しいことである。

さて、わが義太夫協会の記念行事は、①十月十日、義太夫関係の物故者を供養する毎年恒例の祖先祭に、初代義太夫が節付けて初演した「曾根崎心中」の道行を墓前で献奏。②十一月二十七日(火)日本橋三越劇場にお

義太夫協会会長 吉川 英 史

義太夫協会々報  
第32号

昭和59年10月10日発行  
社団法人 義太夫協会発行  
〒104 東京都中央区銀座  
6-18-2 新橋演舞場B2  
TEL (541) 5471

いて記念演奏会を開催。③例月の上野本牧亭の定期公演のうち、九月二十一日の公演は、竹本義太夫に因む話と演奏——となった。

右のうち、①墓前演奏とは、両国の回向院にある義太夫の墓前に、義太夫協会の有志が「曾根崎心中」の道行を合同演奏するもので、雨天の場合は本堂の中での演奏となる。

②の三越劇場での記念公演は、竹本義太夫が節付けて初演した近松の浄瑠璃またはその改作と、水上勉氏の新作脚本、鶴澤重造氏作曲の「蜷川」——竹本義太夫物語——の上演と、スライドによる義太夫節三百年史の回顧の三部立てである。

水上氏の新作「蜷川」は、従来の義太夫節の詞章の型から脱却した文体で、ナレーションの部分の方が多く、作曲者重造氏がどのようにこの難物を処理されるか、関係者は胸をわくわくさせながら完成を期待している。登場人物は、義太夫のほか、近松門左衛門、宇治嘉太夫(加賀掾)、竹屋庄兵衛その他となっている。(2頁下段へ)



ごあいさつ

義太夫節保存会会長 豊 澤 仙 広

義太夫節三百年の祖先祭を、不肖仙広がおつとめさせて頂くと、夢のような喜びでございます。思い返せば、丁度一年前、五十八年九月の国立劇場を最後に舞台を引退した其の時の淋しさは、この身にならねばわからないことでしょう。早くお迎えして下さいと毎朝お念仏をとなえさせて頂いたお恵みで、祖先のお祝をさせて頂く栄光、このうれしさは筆には書きつくされません。

十二歳から八十五歳の今日まで、この道一筋に勉強してきたおかげと、過去をふりかえって色々な想いで苦勞がなつかしく感謝感激、若人の勉強ぶり、早く横綱になって下さいと祈りながら、毎月二十日、二十一日の本牧亭公演を待遠しく生甲斐に感じている今日この頃でございます。

九月の先生のためのお話は、夕方からの雨にもかかわらず座りきれない程のお客様、私も祖先・義太夫師のことを勉強させて頂きました。どうか先生方、この次には生徒さんもお誘い下さいますように、お待ちいたしております。

近松文学の「曾根崎心中」を若人が演

奏いたしました。これは文楽の團六師が指導して下さいました。紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。ごさいます。また、かねて念願の国立劇場でのお稽古が出来るようになりましたのも、義太夫節御支援の皆様のお力添えの賜と、御礼を申し上げます。

今月の二十一日は、義太夫教室卒業生の会、卒業してもずっと義太夫のお稽古を続ける、何と良い御趣味ではありませんか。

十一月二十七日には、三越劇場で義太夫節三百年記念の会が開かれます。水上勉先生の新作というの、私も今から楽しみです。当日は皆様と御一諸に、客席で聞かせて頂きたいと思っております。

また、先日お願いしております三年募金も、皆様が郵便局から御送金下さいますのが心よりうれしく有難く、若い副会長のもと、将来への基盤が出来ていく喜びに、私はただ手を合せ御礼申し上げます。おひきかたて下さいますよう、伏してお願

い申し上げます。

(1頁より)

これらの人物が、水上氏の新様式の浄瑠璃が、女流義太夫界のベテランたちによって、どのように表現されるのか、誠に楽しみで大いに期待される。

③九月の定期公演のうちの二日目を「教師のための義太夫講習会」に当てたが、その時の実演は人間国宝竹本士佐広の浄瑠璃、大阪の鶴澤寛八の三味線、竹澤團生のツレ弾きによる「姫山姥」と、女流若手の掛合による「曾根崎心中」の道行「天神森の段」であった。

後者は、長年廃曲になっていたものを、近年野澤松之輔氏が作曲したもので、原曲通りではないが、初代義太夫が大当たりを取った歴史的な作品である。前者は近松・義太夫のコンビで世に出た作品の中でも、最も原作の形を伝えている曲という意味で、今回の企画にふさわしいものであったと思う。

わたしが話した「竹本義太夫の人と芸」は、講義風でなく、多少講談調を加味したのでテンポが遅く、上の巻で時間となり、下の巻は十一月二十日に持ち越された。

義太夫節四百年記念となる二〇八四年に、百年前の今日を振り返った時、「三百年記念はあんな程度だったのか。」と笑われないようにしたいものである。

## 祖先祭 其の他の事

相談役 豊 澤 猿 三 郎

只今は丁度祖先祭の時でもあり、昔の協会の事について問合せがありましたので、お答え少々お話し致します。

私が赤坂の師匠の許へ内弟子にして戴きましたのは、明治四十三年十二歳の時で、祖先祭は今年で七十五回お詣りさせて頂いて居ります。大正八年には横須賀砲兵聯隊へ入隊致しました。因会は二年連続欠席しますと、格付を一枚下げられます。其の為一日休暇を取り、因会へ出席致します。其頃は京浜急行もバスもタクシーも有りません。市外の隊から駅迄約一時間、汽車で兩國駅迄二時間、十時の開会スレスレです。お詣りして、とんぼ返りで六時に帰営するのは、なかなか労働でした。大正六年十一月国技館の火事で回向院様は類焼、其の為会員は両国美術倶楽部へ集りそのまま墓参、再び倶楽部へ戻り顔寄せです。会報二十号で書きました様に、二百畳の大広間に正面に松太郎師、右へ朝太夫、播磨太夫、津賀太夫の各太夫様十名、左に勝鳳、富助、団平（三代目）の三味線十名、十一番目から女子部、京枝、小清、東玉、小土佐、綾之助（初代）の皆様が並び、十八歳の私など次の間にも入れず廊下で立ちん坊です。中老以上の人は、黒の羽織・袴で実に堂々とした会合

でした。終りますと各師匠はご自分の弟子を連れて「ぼをぶしゃも」或は「ももんじや」で無礼講です。私の師匠など數十人の弟子を連れ大変な事と思われました。大正十二年には大震災で回向院様は又々お焼けになり、誠に御気の毒に存じます。

自分事で恐縮ですが昭和十一年私は母を亡くし、十二年娘を失いましたので、兄猿藏に相談致し犬猫供養塔の建立を思い立ち、因会の皆様にお願ひ致しましたところ多分の御協力を仰ぎました。回向院様でも義太夫様の墓前の土地を無償でお与え下さいましたので立派に建立、今日迄皆様のお詣りを頂き、三味線の皮に張られた犬猫君も浮かばれましょう。

因会の話の序に、先日御書面で会報二十七号で因会青少年三味線腕試験の審査のお師匠方の連名に観西翁氏の名が掲げてないがどういふ訳かとの御質問にお答え申します。観西翁様は私の父初代才造のおとうと弟子に当たる方で、お若い時八兵衛、大造等と名乗られ途中或る事情の為芸名を返上、梅本香伯として素養で語っておられ、大正十一年に竹本若太夫（豊竹は因会で許さなかった）となりの、浅草松竹座で十日間興行しましたが、お客様が来ないので二日間舞い（閉場）しました。

昭和四年東京人形座が創立しました折、竹本香伯で加入、一月興行菅原三の桜丸切腹、二月忠四、三月白石嘶揚屋でした。前幕の雷門（志のぶが悪者に誘拐されるところ）を米太夫さん（先代）の語り場です。此の場が大変な大当りで、この幕の為に十日間の興行に度々来て下さるお客様がずい分おられました。その代り後の香伯さんの揚屋は客席が空っぽでした。香伯さんもご自分の語りが客に受けない事を悟って、其の後公開の舞台で語りませんでした。そんな忙しい人生なので、因会へ入会を忘れたのでしよう。因会としても、前に申した御名人の師匠方と並べる訳にいきませんのでご遠慮願ったのでしよう。三味線は実に結構でした。ジョウ間の八兵衛と言われた程で、長局、玉三、毛谷村、などの地藏経は私も稽古して戴き、喜左衛門様も葛の葉の道行の稽古を受けていました。折角の芸を持ち乍ら、人様とのお付き合いが悪くお気の毒でした。

最後に明るいお話を致しましょう。人形座で米太夫さんの雷門の時間になると二人曳きの人力車で飛んで来る芸妓さんがいました。「アノ鬼こわいと逃げ廻る」で独特の米太夫節が大喝采で終ると、待たせておいた人力車で帰ります。十日間一日も欠かさずです。今時そんな芸やお客様が欲しいですネ。ア、申し忘れしました。其の芸妓さんが晩年米太夫さんのおかみさんになって貞節を尽くし、最後を看とりました。御退屈様です。

## 富士の裾野でねえんね

— 吉金の駒のこと —



鶴澤英治

「富士の裾野で寝えんね」祖母の口ぐせの童べ唄が、真次の吉五郎師の口から出るとは思いもよらぬ事でした。それも童べ唄とは縁の遠い文楽の楽屋（昭和十年頃）での駒談議の最中でした。吉金の駒の特徴は外刳（そとぐり）が富士の裾野でねえんねの形になっているのでよく鳴るのだとの意見でした。事実この外刳のなだらかさが太棹の音に影響する事、大であるは、斯道にたずさわるお師匠方は御承知の事と思います。

義太夫の駒の形は、江戸末期より明治初期及び中期にかけて、急激に変化しました。これは大團平師匠の音に鋭敏な研究の結果と、これに協力の形で思い切った技術を駆使したのが吉金で、其の良心的な作品は現在に至る迄、最高品とされています。その頃迄の駒の形は、糸受より斜め両翼に延びる線が山の斜線一直線に近いものでしたが、吉金の駒は「富士の裾野でねえんね」の唄のような外刳のなだらかさに伴い、中刳（なかぐり）下刳（しもぐり）に至る大胆な刳方は当時として画期的な技術の進歩で、これに堪える素材の質の厳選と共に刷新的な美しい音色に加え、音量の大きさはそれ迄の駒とは比較にならぬ程でした。吉金の功績と大團平師匠の着想は偉大と云う外はありません。この影響は地唄、清元、常磐津、其の他の中棹界にも及んだと云われています。従って他の駒師の模倣する所となり、模造品が続出し現在残っている吉金らしき駒の中には、この模造品が混じっているのに再々出くわします。吉金の特徴ある朱漆の記し方で判別するしかない有様です。

吉金の使用素材は、黒水牛、紅水牛、白水牛の三種あり、黒水牛が良いとされていますが紅水牛にも優れた良品が、まま見られます。駒自体の硬度の比重も音に影響があり、糸受が硬度の高い方、駒座に下る程やわらかく白水牛の硬度がよいのですがこの度合の硬度のそろった素材がすくなくなかなか見付けるのに時間がかかったようです。吉金の駒でもこの度合の素材を吟味してないものもあり、よ

い音色の出ない駒もあります。吉金の駒師としての在り方は「駒金さん」と仇名された通り非常にブライドの高い人だったといわれていますが、需要数に限りのある駒の事、それに値の安い模造品におされ、時には当時の師匠連の好みの注文に応じ「富士の裾野にねえんね」に深淺があり、駒の高さに違いがあり、どの寸法が吉金の標準であるか、定かではありません。吉金は、あまり人と逢いたがらなかつた人、いわゆる職人として、詳しい日常生活、態度はほとんど不明に近い人と聞いています。吉金は親子二代迄明治初期より昭和初期に至ると云われています。吉金の系統を継ぐ人達も二三人ありましたが今では途絶えており、義太夫の駒師すらいない現在、寂しい限りです。

住友さん おめでとうございます  
寛八さん

— 人形浄瑠璃因協会賞 —

お孫さんと本牧亭に出演したり、最近  
は若い人の育成に力を入れている竹本住  
友さん、毎月のように本牧公演で活躍し  
ている鶴澤寛八さんが、「絵本太功記」  
尼ヶ崎の段のすぐれた演奏により、昭和  
五十八年度人形浄瑠璃因協会賞を受賞さ  
れました。

協会の動き

昭和59年6月より  
昭和59年10月まで

【昭和五十九年】

- 6月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭
- 6月21日 広報活動に関する懇談会 於芸団協会議室
- 6月29日 定例総会 於文明堂築地店
- 7月9日 常務理事会 於アリス
- 7月14日 資料部会 於事務局
- 7月20日 教師のための義太夫講習会—義太夫と近松の世界 於本牧亭
- 7月21日 竹本重之助を偲ぶ会 於本牧亭
- 7月26日 義太夫節三百年企画委員会 於新小松
- 7月27日 義太夫教室第37期 閉講式 初級(入門コース) 32名が卒業した。 於銀座三丁目東町会事務所
- 8月10日 常任相談役会 於新小松
- 8月11日 資料部会 於事務局
- 8月13日 常務理事会 於新小松
- 8月16日 昭和59年度民間芸術等振興費補助金額内示
- 8月17・18日 教師のための義太夫講習会 於銀座三丁目東町会事務所
- 8月20・21日 女流若手盛夏勉強会(芸団協助成) 於本牧亭
- 8月28・30日 女義後継者育成事業 曾根崎心中道行 指導—竹澤團六師 於国立劇場稽古場
- 9月1日 下町風俗資料館にて、義太夫関係資料展示開始(10月末日まで)
- 9月3日 義太夫教室(文化庁助成) 中級三味線コース開講 於銀座三丁目東町会事務所
- 9月5日 義太夫教室中級語りコース開講 於銀座三丁目東町会事務所
- 9月8日 資料部会 於銀座三丁目東町会事務所
- 9月14日 義太夫節三百年企画委員会 於都民銀行会議室
- 9月20日 義太夫協会公演会 初代竹本義太夫の祥月命日に因み、曾根崎心中道行を演奏 於本牧亭
- 9月21日 教師のための義太夫講習会—竹本義太夫の人と芸 於本牧亭
- 9月30日 娘義太夫精進の会(鈴木一光氏助成) 於本牧亭
- 10月6日 芸術祭コンサート 邦楽・音色さまざま—伝統音楽の継承と発展
- 10月10日 土佐広・寛八出演 於国立劇場 義太夫協会会報第32号発行

〈改名〉

鶴澤政一郎改め鶴澤正一郎(まさいちろう)  
豊澤幸純改め野澤錦輝(きんてる)  
師・豊澤猿幸亡きあと、九月末日に亡くなった鶴澤三生に師事しておりましたが、このたび野澤錦糸に入門。10月20日、本牧亭にて御披露をいたします。

〈寄贈〉

榊原 功氏 文政十一年番附コピー 一部  
財団法人古曲会 ガラス入書籍棚  
山台 二台  
豊澤 時若氏 アガリ糸 多数  
豊澤 猿幸師御遺族様 床本・五行本 多数  
猿幸師その他のテープ 多数  
(段ボール箱三、四ヶにぎっしりの貴重なテープです。早速、資料部が整備を開始いたしました。)

二代目竹本朝重

おしどり

第23回竹本朝重リサイタル  
\*昭和五十九年十一月一日(木)  
\*六時開場 六時三十分開演  
\*銀座ガスホール \*一、五〇〇円  
小泉八雲 原作  
◇おしどり(吉永淳一作・鶴澤重造作曲)  
◇伊賀越道中双六 沼津の段  
問合せ (七五四) 七三〇四

# 義太夫節三百年記念公演 内容決る

十一月二十七日 三越劇場で

水上勉・作 蜷川 一 竹本義太夫物語——ほか

祖・竹本義太夫が、大阪道頓堀に竹本座の櫓をあげて丁度三百年、義太夫節三百年記念行事の掉尾を飾る記念公演の日が近づいて参りました。内容が決りましたので御案内いたします。お誘い合せお出かけ下さいますようお願いしております。

丹波与作待夜小室節より

「道中双六」 若手 掛合

お誘い合せお出かけ下さいますようお願いしております。

## 義太夫節三百年記念公演

\*日時 昭和五十九年十一月二十七日(火)  
午後六時開演・五時十五分開場

\*会場 日本橋三越劇場(二四一)三三一

\*入場料 当日 二、五〇〇円(全自由席)  
前売 二、二〇〇円( )  
前売開始 十月二十日(土)

お問合せ・お申込みは  
義太夫協会事務局  
電話(五四一)五四七二  
(月)金 十一時(四時)

### 《番組》

スライドによる

義太夫節三百年の歴史 吉川 英史

水上勉・作 鶴澤重造・作曲

蜷川——竹本義太夫物語—— 朝重

近松門左衛門 竹本 越道

宇治嘉太夫 竹本綾之助

竹屋庄兵衛 竹本 素八

町 衆 竹本駒之助

三味線 鶴澤 重輝

ツレ弾 豊澤 仙雛

恋女房染分手綱 太夫 竹本土佐広  
重の井子別れの段 三味線 鶴澤 寛八

### 道中双六

丹波与作待夜小室節(近松門左衛門作、宝永四年八一七〇七)初代竹本義太夫初演)

馬方三吉が、双六を出して姫君の御機嫌をなおす。その道中双六の部分、若手中心に合奏曲風に演奏します。

丹波与作のうち、この部分は、義太夫が後に自分の後継ぎにと遺言することになる政太夫に語らせたといわれています。三百年後の義太夫節の現状とオーバラップするところはないうか。

### スライドによる三百年の歴史

昨年の「女流義太夫の今昔」に続き、今回もスライドを使って解説いたします。吉川会長が肩衣をつけて登場する——のびのびになっているこの趣向が実に実現するかどうか、これもお楽しみに。

### 蜷川——竹本義太夫物語——

水上勉氏の脚本、重造師の作曲、新しい形の語り、いずれも幕をあけてのお楽しみ。水上義太夫と、教師の講習会で話された吉川義太夫(9、13頁)の相違点は?

### 重の井子別れ

丹波与作待夜小室節の増補改作。改作とはいえ原作と殆んど変っておらず、初代義太夫初演当時の面影をとどめています。人間国宝、87歳の竹本土佐広に御期待下さい。

# 女義のレコード

― 来春発売 ―

九月二十五日付、朝日新聞で「後世に残る女義太夫 集大成にレコード化 復活機運の中、土佐広ら力演」と報道されましたように、久しぶりに女流義太夫のレコードが発売されることになりました。

△邦楽にも造詣の深い音楽評論家の中村とうよう氏が「このままではいまの盛り上がり歴史に残せない。女流義太夫の現況を集大成した保存盤をつくってほしい」と企画をテイチクに持ちかけ、レコード化が実現した（朝日新聞記事より）ものです。現況ということで、すべて新規の録音、このほど収録が完了いたしました。

内容は下記のとおり、ポピュラーな作品で演奏者の持ち味が充分にかされた企画となっております。女性ならではの……あるいは反対に、とても女性とは思えない……両面あわせもつ女流義太夫の魅力をたっぷり御堪能頂けることでしょう。

LPレコード 四枚組 一〇、〇〇〇円  
昭和六十年一月二十一日 発売予定

\*義太夫協会でもお取次いたしますので  
どうぞお申しこみ下さい。

## 女流義太夫・いま（順不同）

B	A	B	A	B	A	B	A		
新版歌祭文 野崎村の段 <small>（後）</small>	新版歌祭文 野崎村の段 <small>（前）</small>	菅原伝授手習鑑 寺子屋の段	菅原伝授手習鑑 松王竹本 素八 戸浪竹本 駒龍 玄蕃竹本土佐恵 三味線 鶴澤 寛八	傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段	源蔵竹本土佐廣 千代竹本 春華 松王竹本 素八 戸浪竹本 駒龍 玄蕃竹本土佐恵 三味線 鶴澤 重輝	寿連理の松 湊町の段	太夫竹本 染登 三味線 鶴澤 友路	艶容女舞衣 酒屋の段	太夫竹本土佐広 三味線 鶴澤 寛八 高音 野澤 錦輝
太夫 竹本駒之助 三味線 鶴澤 重輝 ソレ弾 野澤 錦輝	太夫 竹本 朝重 三味線 鶴澤 重輝	太夫 竹本 素八 戸浪竹本 駒龍 玄蕃竹本土佐恵 三味線 鶴澤 寛八	お弓 竹本綾之助 おつる 竹本 綾一 三味線 鶴澤 重輝	太夫 竹本 染登 三味線 鶴澤 友路	太夫 竹本土佐広 三味線 鶴澤 寛八 高音 野澤 錦輝	太夫 竹本 染登 三味線 鶴澤 友路	太夫 竹本土佐広 三味線 鶴澤 寛八 高音 野澤 錦輝	太夫 竹本土佐広 三味線 鶴澤 寛八 高音 野澤 錦輝	太夫 竹本土佐広 三味線 鶴澤 寛八 高音 野澤 錦輝

テイチク株式会社

## 下町風俗資料館

一階に、大正時代の長屋や路地がそっくり再現され、浴衣をほどこいたおしめまで干してある——ユニークな展示で来館者の郷愁をさそっている下町風俗資料館を御存知ですか。二階展示室では、十月末日まで、小芝居・本牧亭等のコーナーと並んで義太夫関係の展示をしております。見台・肩衣・床本・三味線はもとより、娘義太夫の番附、楽屋のれん、古い写真等が並べられています。上野不忍池のほとり、本牧亭のすぐそばです。どうぞ一度おたちより下さい。

- ・入館料 二〇〇円
- ・月曜休館
- ・午前九時三十分～午後四時三十分
- ・電話（八二三）七四五一・七四六一



## 企画と芸と人と

池田弘一

九月二十一日、土佐広の「姫山姥」を感激をもって聴くことができた。

江戸の芝居が顔見世から新年度を展開させていたと同様に、義太夫協会の新しい年は師走の忠臣蔵から始まっているように私は思っている。その出発点にあたる師走の忠臣蔵の七段目で、土佐広と春華は確かに掛合の妙、「芸と人」との調和ともいふべきものを堪能させてくれた。以来、この五十九年という年のほとんど毎月、土佐広は本牧亭に出動し、精魂をこめた演奏活動を続けてきた。壺坂、酒屋、あるいは野崎の久作と、その演目がやや限られた範疇のものであることに多少のうらみはあるものの、何よりも人間国宝という地位におさまらず、そのきちんとした演奏姿勢を熱意をもって示し続けたことに私は敬意を表し、よろこびを感じている。

その土佐広が久々の「姫山姥」である。この日は「教師のための義太夫講習会」、吉川英史会長の懇切な講話・解説もご馳走だが、土佐広・寛八が「姫山姥」を、近松・義太夫ゆかりの曲として演奏したことは大ご馳走である。そのへんのねうちのおそらくわからなかったであろう当日の参加者のために申し添える。

本牧亭はいっぱいの入り、その聴き手は再三のお膝送りにも機嫌よく応じて行儀よく、熱心に聴き入っていたとみた。ところが、思わぬところで場内に「ザアッ」という音が波を打って流れた。あの資料として提供されている台本のページをいっせいに繰った、その音だったのである。

息をつめる思いで聴いていた私は、「土佐広の浄瑠璃は本なんか見ていなくたってわかる浄瑠璃なんだ」と言ってみたくも言えなかった。なるほど、浄瑠璃というものを初めて聞く人、しかも勉強のために来た人たちには語りと台本とを突き合わせることで以外に理解の道がないのかも知れない。しかし、私は何か大きく間違っているといたい。しかもそれが私と御同業の方のしわざなので悲嘆やるかたない思いなのである。

次回の同種の催しの際は、是非とも台本を読み込んでもらう時間を、演奏の間にもうけて、同時にその旨を指示してほしいものだ。やがてツレ弾きの團生があがって一礼、いづもだと拍手の贈られるところだ。この夜、この拍手は全くなかった。これは実に結構なことだ。日ごろは掛合の一人がひっこんだ時にも必ず拍手が贈られる。この種のいたわり

が舞台の芸を乱し、聴者の感興をそぐ。それがなかったのは当夜の客が、常のならわしを知らぬお客さんだったからであろう。活字に縛られて芸を思えぬこと、拍手によって芸を乱すこと、考えさせられることである。

それにしても企画は大切だ。当夜の成功もそこにある。例月も両副会長は熱意をこめて企画を練っておられる。しかし、しばしば出演者の都合が優先したかと思われる番組にぶつかると、私の恐れている「芸より人」の番組である。八月、駒之助は朝顔話の「舟別れ」を語り、九月、酒屋・大井川を実に丁寧に情をこめて語り切った。いつも通しがいいわけでもないし、抜かずに語ることだけがよいわけでもないが、時として演者は自ら研究心をかきたて、未開拓の分野への挑戦を見せるべきだと思ふ。菅原にしろ千本桜にしろ、好個の研究課題はいくらでもあるはずだ。

個人にかかわることを書くことははばかられるが、病母の看護にやつれながらも誰れよりも早く出勤し、楽屋のほどよい位置にぴたっと控えていた駒之助には、きつと秘めたる思い・祈りがあつたであろう。それはおのづから演奏を充実させた。個人の事情を表に出さなかつた演奏を、遙かに遠く、うれしく聴きとつた人が、芸の人がいたはずである。

企画と芸と人と。個人の事情を持ち出したら企画はつぶれ、芸はくずれ。芸に生きるより他に道のないはずの人々の奮起を願う。  
(部立工業高等専門学校教授・特別会員)



# 竹本義太夫の人と芸 (上の巻)

— 教師のための義太夫講習会より —

解説 吉川英史

九月二十一日、本牧亭で「教師のための義太夫講習会」が開かれ、土佐広・寛八の「姫山姥」若手による、曾根崎心中道行が演奏されました。今回の吉川会長の話は、多少「講談調」で語る「竹本義太夫の人と芸」でありました。アンケートによると「やさしい言葉でユーモアも混え実に明解な解説」「半分講談調の講演会という感じ」「人柄がにじみ出ている」「簡明・明解で要を得た解説が初心者には有難い」話でした。紙面の都合で完全な再現は出来かねますが、いくら何でも当日の雰囲気がお伝えできれば幸いです。所々、パン・パンと張り扇の音を混え、講談調でお読みになるのも一興かと存じます。それでは、吉川斎英史先生による「竹本義太夫の人と芸」ごゆっくりお楽しみ下さい。(副題は掲載にあたってつけたものです。)

## 江戸では由井正雪の乱

さて、慶安四年四月、徳川三代將軍家光が働き盛りの四十八歳で逝去いたします。上野東叡山の法事に奉行を勤めました三河の国・刈谷の城主、松平能登守定政は、將軍家に殉死する代りにと、長男及び二人の家来を連れまして「松平能登の入道にも給え」と江戸の町を墨染めの衣姿で托鉢して回りました。これに驚いたのが町奉行、にわか評定をいたしましたして定政の所為は狂気の沙汰であると判定、刈谷の城と領土は没収、定政は兄のところにお預けの身となった訳であります。將軍の死去とか、その親戚にあたる松平家の氣

狂い沙汰とか、江戸の市民は不安におののいておりました。これを絶好のチャンスとみて、由井正雪は丸橋忠弥を指揮官といたしました。江戸城乗っ取りの隠謀を企てたのであります。

## 五郎兵衛の誕生

江戸ではこのような不穏な乱がありました。慶安四年、大阪の天王寺の村では誠に平和な日々が続いておりました。天王寺南堀越の農家に、おそろしく大きな産声をあげて生れたのが、五郎兵衛と名づけられた男の子、後に義太夫節の開祖・竹本義太夫となる人でございます。しかし、このゴロベエちゃん、誠に

異様な顔をしておりまして、顔の真中に実にアンバランスな大きな鼻のっかっております。その大きな鼻というものは、実に巧みな共鳴箱でございまして、義太夫が大音であった、大声をもっていたということ、一つにはこの鼻の大きさによるのではないかと思うのであります。

## 五郎兵衛浄瑠璃語り

さて、当時の大阪の浄瑠璃界は、井上播磨掾という人が牛耳っておりましたが、その高弟に清水理兵衛という人がおりました。理兵衛の本業は料理屋であります。その浄瑠璃は玄人はだしというのでしょうか、誠に堂に入ったもので、その他、生花・茶道・囲碁・俳諧と広い教養のある風流人でもございました。その理兵衛の稽古場が、五郎兵衛の働いておりました畑のすぐそば、崖の上にあつた訳でございます。毎日のように畑で浄瑠璃を聞くものですから、いつの間にか覚えるようになりました。そこである日のこと、聞えよがしに大声を張りあげて浄瑠璃を語っておりますと、幸いにそれを聞いたのが清水理兵衛、素晴らしい素質があることを見抜いて、仕込んでやろうということになったのであります。五郎兵衛、二十一歳、寛文十一年のことです。ございました。

## 清水理太夫と名乗ってデビユー

師匠の理兵衛、更にはその師匠の井上播磨掾にも口伝を受けました天王寺五郎兵衛は、

二、三年の後、道頓堀の虎屋喜太夫座に清水理太夫を名のりまして入座することになりませぬ。これが五郎兵衛こと理太夫のデビューとなる訳でございます。

京の嘉太夫に入門

しかし、向上心に燃える理太夫は、毎日ただ語るのでは満足しなくなり、師匠の許しを得まして、一座を引卒、京都へと出かけます。四条河原で興業を打ちますが、入りが悪く失敗、そこで五郎兵衛は敵方ともいべき宇治嘉太夫―上方浄瑠璃界の大立物―の座に入座する訳であります。それは結局、敵方の芸を身につけて一廻り大きい芸人になろうという、誠に大乗的な大胆な考え方でありまして、竹本義太夫が後に浄瑠璃界の覇者になった原因は、実にここにあると思えます。

清水理太夫は、その頃、嘉太夫のワキを語っておりました。ところがある日のこと、西行物語の二段目、藤沢入道夜盗の段という、ものすごい場面を誠に豪快に語りました。嘉太夫は、繊細・優美な芸を得意としておりませぬから、これは嘉太夫には苦手な技でありませぬ。嘉太夫は、この芸を聞きまして、「後世恐るべし、自分のライバルになるのは理太夫だ」と思った訳であります。

出奔のなぞ

ところが、当の理太夫は、少々の人気では満足できませんでした。突如として嘉太夫座から脱退し、旅に出たのであります。一行は、

もと嘉太夫座の興行師をしておりました竹屋庄兵衛、金主であります。これが芸のことで嘉太夫と不和になりまして別れたといういきさつが、ございます。この竹屋庄兵衛と、三味線弾きの尾崎権右衛門、この三人が手を手をとって西国へ旅をする訳であります。その原因は何だったのでしょうか。

- ①竹屋庄兵衛が金を出して、理太夫を買収したのでしょうか。それとも……
  - ②天王寺の百姓出身の理太夫が、京美人に、ひょっとしたら師匠・嘉太夫の娘か奥さんに不義をして、師匠の処にいられなくなつたのでありませうか。――新内の魯中という人は、家元の娘さんと不義になつて破門、その破門が幸いして沢山の作品を創り、富士松という別派を立てたのでした。それとも……
  - ③敵方、嘉太夫の芸を盗む、その目的を達すれば、いつ迄も居る必要はない、早く独立したいために脱出したのでありませうか。それとも……
  - ④この新参の理太夫を嘉太夫がかなり可愛がつた。そのことで先輩達がいじめるようなことでもあつて居心地悪く、脱出したのでありませうか。或いは、嘉太夫が理太夫を後継ぎにしたくて娘を押しつけようとでもしたのでありませうか。
- 竹本義太夫の伝記の中で一つの大きな謎でございます。

浄瑠璃開眼

さて、理太夫、庄兵衛、権右衛門の三人は、おそらく途中で旅興行をしながら、安芸の厳島・宮島へとたどりつきます。厳島神社では、その当時に開いておりまして、諸国から沢山の人が集まり、賑やかでございます。そこで腰をおちつけ、興行をいたしますが、この興行で人気が出る等ということに理太夫の心は向いておりませぬ。将来の身のふり方、新しい浄瑠璃はいかにすべきか、もつと浄瑠璃を魅力あるものにするにはどうしたらよいか、と真剣に考えておりました。そこで、昼間は興行、夜は静かな厳島神社の社殿の前で、あの赤い朱塗りの鳥居の下をさざ波がよせるその音、あるいは磯馴松に風の吹く音、そういうものを聞きながら一心不乱に祈り、考えた訳であります。その時、心にひらめいたのは、自分は井上播磨の流儀を学んだけれども、井上流から一步でもはずれたら師匠に不義理になるのであるか。もつと立派な浄瑠璃をのみ出すことこそ、むしろ師匠への恩返しではなからうか。井上播磨のあの豪快な語り方、一方、嘉太夫の誠に繊細で上品な芸も学ばべきものがある――このあい異なる二つの流儀の良い所を合わせたら、浄瑠璃というもののは大きく飛躍するのではあるまいか。大きな浄瑠璃のために勇往邁進、新しい第三の浄瑠璃を志したのであります。竹屋庄兵衛、尾崎権右衛門も理太夫の熱意、悟りに感激いたしました。三人の盟約は益々深く、強くなりまして、新しい浄瑠璃の開眼であります。

## 竹本義太夫の旗あげ

貞享元年、一六八四年と申しますから、今から丁度三百年前、道頓堀に人形芝居の座を創設いたします。これを期に、清水理太夫は竹本義太夫と名乗る訳であります。この竹本の竹は、自分を助けてくれた興行師の竹屋庄兵衛の竹であります。義太夫の義は、義を重んずるといふ意味でつけた訳であります。考えてみますと、竹本義太夫は、はじめ理太夫といい、今また義太夫となった、義と理と合せて義理というものを大変重んじた人でありました。近松は、後のち、ほとんどの浄瑠璃に義理というものを大きなテーマといたしました。或いは、義理というタテ糸に、人情というヨコ糸を織り合せたのが近松の浄瑠璃といつていいかもしれません、それは作者・近松が考えた私どもは思ひ易いのですけれども、ひょっとしたら近松よりも、義太夫がそういうものを書かせたという方が当っているのかもしれませんが。近松が義太夫のものを書く以前のものと以後のものを比べますと、多少そういうフシがあるように私は思うのであります。

## 浄瑠璃合戦

ところで、義太夫の旗あげ興行は、近松が義太夫のために書いた「世継曾我」という浄瑠璃でございました。嘉太夫から独立した義太夫が、その義太夫のものを拝借するというのは少しどうかと私は思うのですけれども、しかし、とに角その結果は大成功でございま

した。その頃、町のミーちゃん、ハーちゃんまでが世継曾我の一節「さり」としては恋は曲者くせものとうなりながら歩いていたといえますから、これをもつても義太夫達の成功がよく判ると思うのであります。その後も、義太夫の竹本座は、嘉太夫の手がけた浄瑠璃を次々とやって好評を得ました。当時は、著作権などというものはなかったのかもしれませんが、どういふものか、嘉太夫がやったものをやっている。或いは、嘉太夫はああいふ風にやったが自分ならこうやれるということを示すためにわざと嘉太夫のものを使ったのかもしれないとも思うのであります。こういうことは、どうも調べたところで判りそうにございせん。

ところで、義太夫の噂を京都で聞きました宇治嘉太夫——当時、芸人の最高の榮譽であります掾号を貰っております。受領して加賀掾と名乗っておりますが、この加賀掾にとつて、若い義太夫が、しかも自分のところでワキを語っていたあの理太夫が、自分の作品を使って人気をさらっている、これは不快なこととでございましょう。とうとう堪りかねて、大阪に出かけ、義太夫に挑戦することになった訳であります。その時の嘉太夫こと加賀掾の演しものは、何と八厩、カレンダーという外題の浄瑠璃で、元祿の文豪、井原西鶴の書いた浄瑠璃でございました。

それを迎え討つ義太夫側は、近松にやはり厩を題材にした浄瑠璃を作らせます。こちらは八賢女やちんね手習てならひ并新厩しんぐらという誠に妙チクリ

ンな外題でありまして、「ナラビニ」等というので結んである外題は、数ある浄瑠璃の中でこれしかありません。

ところで、厩というものをなぜ浄瑠璃にしたか。私は厩などというのでは浄瑠璃にならん、と軽く考えておりましたが、後で判ったのであります。実にやはりこうなくては浄瑠璃は盛んにならないなあと思うことになりました。というのは、今の人は、もう厩は決っているかのように思いますけれども、昔は二十日ふゆで一月とか、二十日ふゆで十八ヶ月で一年とかいう時代があったり、中国で作られた厩では日本にうまくあてはまらなかったり、次第に実情と合わなくなつて参りました。そこで、この貞享二年という年に新しい厩を使うといふので、日本中が大変驚いたとか、動揺したといひましようか、そういう所謂ホットニュースなのですね。その時代のことをすぐに浄瑠璃にしくむ訳でありますから、これなるが故に浄瑠璃が大入満員になったんだと私は思います。今は、昔からの浄瑠璃を芸術的に磨き上げることだけに専念しておりますけれども、昔は、大事件があればすぐにそれを浄瑠璃にする。おそらく近松などは、ロッキード事件なんというものはすぐに浄瑠璃にしたと思うのであります。

厩と新厩の勝負、これは、迎え討つた義太夫・近松組の方が勝ちまして、嘉太夫・西鶴組が負けました。そこで、嘉太夫は、京都から遠征してきて若造の義太夫に負けてはならんと、すぐに外題を変えまして、西鶴に八凱

陣八島Vという浄瑠璃を作らせませす。凱陣<sup>陣</sup>という幸先の良い浄瑠璃で嘉太夫こと加賀掾は再び義太夫に挑戦するのであります。

火災で敗退

ところが、今度は八凱陣八島Vの評判がで、どうやら嘉太夫側に勝利の女神が微笑みそうになった矢先に——講談ならここでペパンパンと入るところですが——嘉太夫の方の芝居から火が出た。人形も衣裳も道具も、みんな焼けて灰燼に帰した。涙を吞んで嘉太夫は京都へ帰りました。それ以後、嘉太夫は再び大阪には出て来ませんでした。この浄瑠璃合戦は技術で勝負がついたのでなくて火事で勝負がついた、誠に後味の悪い勝負でありました。残念なことだと思えます。

この時の義太夫の心境を考えますと、私は本当に同情にたえません。普通の人なら、勝った義太夫は喜んだと思うかもしれませんが、私は義太夫の性格を考え、人柄を考えます時に、簡単に喜んだ義太夫ではないと思えます。仕かけられた戦さとはいいながら、師匠を相手に戦わねばならなかった、しかも、最後は、むこうの方が良いと見えたのに火事で敗退した、誠に申し訳ない、何と言ってもいいか判らないほど義太夫は複雑な心境になったと思えます。しかし、ただ勝を譲るという訳にも参りません。何しろ、大阪に沢山の義太夫ファンを持っている、八百長で負けたら、それこそ芸人としての生命がなくなる、そう考えると、勝った義太夫の心境は複雑であったと思えます。

火災の原因は

ここで、この火災について考えてみたいと思えます。今まで、余り火災というものは問題にされておられません。「火事が出て嘉太夫は京都に帰った」と簡単に記録されているだけであります。もしも、これが失火でないとするればどうであろうか？ 一体どういう風に火事がおこったのか？ 何故おこったのか？ 誰が火をつけたのか？ ということになると思うのであります。

CM CM CM CM CM CM CM CM CM CM  
一寸ここで義太夫協会とFM東京のコミニシャルを。実は、義太夫節の三百年にあたりまして、協会とFM東京で、水上勉氏に竹本義太夫をテーマにした新しい浄瑠璃を作って頂き、重造氏が作曲をされ、協会の女性陣がこれを語るということになっております。ラジオは、芸術祭参加になるかと思えますが、十一月二十七日、三越劇場でこれを実演することになっております。水上勉氏は、この火事をどう扱っておられるか？ それはお聞きになってのお楽しみとしておきたいと思えます。

さて、放火だとすると、どんな犯人像が浮んでくるでしょうか。推理してみますと、①嘉太夫側の分が良いことを心配いたしました義太夫側のひいきが放火したのではなから

うか。これは、義太夫本人は何も知らないことであります。ひいきというものは、それ程有難いもので、また恐ろしいことでもありません。

②嘉太夫一座の若い太夫に恋をしていた女が、その恋が容れられない。その苦悶・悩みのために火をつけたのではなからうか。丁度これより三年前に、江戸では八百屋お七が火をつけているのであります。

③興行師の竹屋庄兵衛は、嘉太夫と喧嘩をして別れた人でありますから、嘉太夫にいい気持は持っておりません。自分が引き抜いた義太夫の旗色が悪くなった、その心配のあまり自分では火をつけないうえに、人を雇って火をつけさせた等ということは考えられないであろうか？ こう思う訳であります。

義太夫の伝記の中から、いつの間にか竹屋庄兵衛の名が消えて行く。私は、それを不思議に思っております。義太夫は、後に一座の経済的負担までかかえて、悩んだ末、「やめたい」ということになるのですが、「それは、経済的負担で悩む座元の方はおやめになつて結構ですが、浄瑠璃太夫の方はやめて貰っては困ります」と、皆からなだめられてやつと引退を思い止まるのであります。竹屋庄兵衛が、いつの間にか義太夫から手を引いたことよって、義太夫の赤字の悩みが長年続く訳であります。そこで私は、こんな想像をしてみたのであります。さて皆さんは、どれが一番可能性があるとお思いでしょうか。

新浄瑠璃

さてそれから、竹本義太夫は、近松の作り  
ました八出世景清を上演いたします。これ  
が新しい浄瑠璃の第一作になって、「当流」  
或いは「新浄瑠璃」といわれ、それ以前のも  
のを「古浄瑠璃」ということになる訳であり  
ます。古浄瑠璃と新浄瑠璃を分ける、その記  
念すべき八出世景清、これが正に義太夫の  
出世の糸口であったかも知れません。

その後、大きな変革として「世話もの」と  
いうものを初めてやった。これが大当りをと  
って、それまで赤字であったこの竹本座が、  
大いに黒字になった。これを機会に、義太夫  
は出家したいというような仏心をおこしまし  
て引退しようとするのですが、今申したよう  
にやめさせて貰えない、続けていく訳でござ  
います。

これから義太夫が亡くなるまでのことを申  
しますと、余りに長くなりますので、上の巻  
はこの辺で終りまして、この次に下の巻とし  
て義太夫の生涯の続きをお話してみたいと思  
います。

この続き、下の巻は

十一月二十日(火)次回の教師のための義  
太夫講習会で行います。当日は、八王子車人  
形が「葛の葉・道行」に出演することが決定。  
翌二十一日には、同じく八王子車人形によ  
り「葛の葉・二度目の子別れ」という珍しい  
部分が上演されることになりました。

義太夫節三百年にあたり

基金募金のお願い

会員各位ならびに関係者各位には、九月初  
め、別記「基金募金のお願い」を郵送させて  
頂きました。大変厚かましいお願いですのに  
各方面の方から御協力を頂きまして、誠に感  
謝の念にたえません。三百年の歴史をもつ義  
太夫節の三百年から先へ向けての私共の責  
任を考えますと、改めて衿を正さねばならぬ  
思いでございます。

基金募金のお願い

本年(一九八四)は、義太夫節の祖・竹本  
義太夫が、貞享元年(一六八四)に義太夫節  
を興して満三百年、各時代・各層の方々の御  
愛好を得、この記念すべき年を迎えることが  
できました。これも皆様の御後援の賜と厚く  
御礼申し上げます。

しかし、この間、種々の浮き沈みがあり、  
特に第二次大戦後は、日本古来の伝統芸能が  
すべてそうであったように、義太夫節も後継  
者不足で前途が危ぶまれましたが、関係者の  
努力でこの危機を脱し今日に至っております。  
文楽には、国や大阪府等から年間一億数千  
万円の援助があり、本年四月、国立文楽劇場  
も開場いたしました。しかしながら、当義太  
夫協会は文化庁から若干の助成を受けている

だけで、あとは皆様の会費と御寄附、協会幹  
部の資金もちりより等で細々と運営している状  
態です。

幸い近年は、二十代・三十代の後継者が増  
えては参りましたが、ベテランの高齢化が急  
速に進み、両者の間には、芸の力と年齢とに  
大きな開きが生じてしまいました。指導にあ  
たる者が未だ健在のうちに受け継ぐ体制を整  
えることが目下の急務であります。

義太夫というと、とかくお年寄りのものと  
思われがちですが、若い支持者が着実に増え  
ている昨今、女流義太夫・歌舞伎義太夫(竹  
本)・舞踊地方等幅ひろく活動する義太夫協  
会の責任は重大です。三百年の伝統を守ると  
同時に、義太夫節の普及にもこれまで以上に  
力を入れる必要を痛感しております。

つきましては、大変厚かましいことではご  
ざいますが、この重大危機をのりこえるため  
別記要領にて御支援賜りたくお願い申し上げ  
ます。 敬具

記

\*募金額 一口 五、〇〇〇円

\*期間 昭和五十九年九月〜十二月末日

\*払込 郵便振替 東京4-1100684

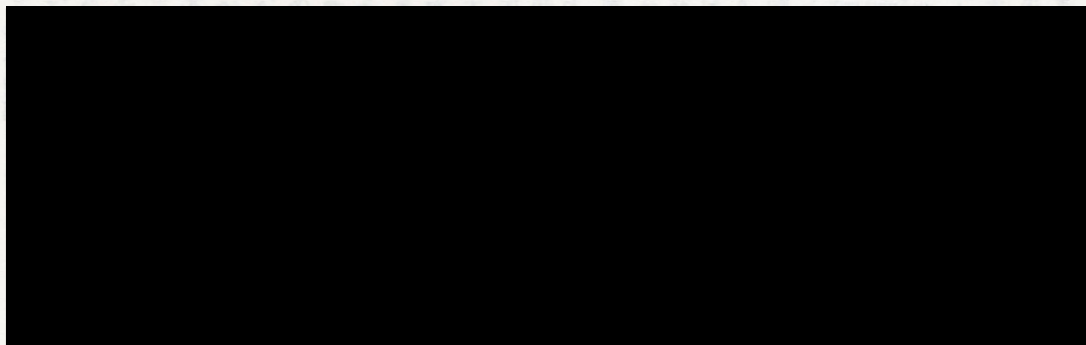
\*事務所 〒104東京都中央区銀座六-18-2  
新橋演舞場B2

電話(五四一)五四七一番

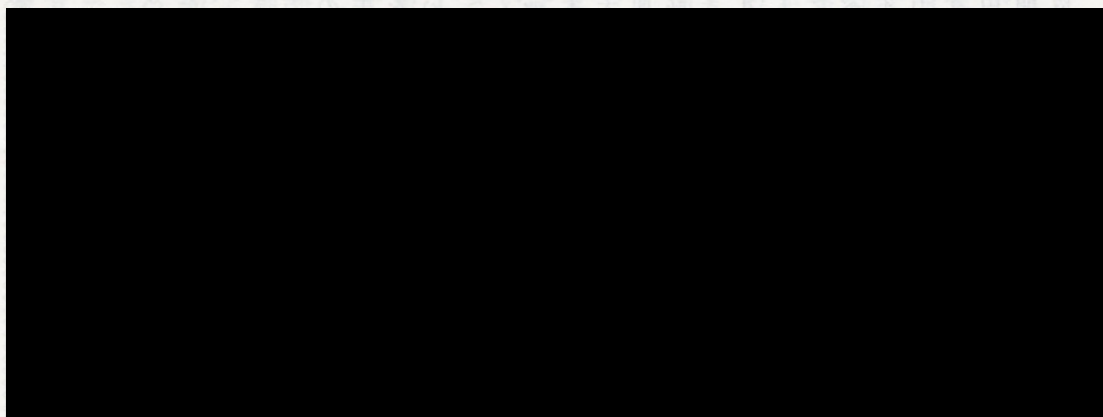
社団法人義太夫協会

各位

\*\*\*\*\* 新入会員御紹介 \*\*\*\*\*



\*\*\*\*\* 移転・住居表示変更 \*\*\*\*\*



訃報

■鶴澤 扇糸師 (昭和59年8月15日逝去)  
六代目菊五郎を弾いた竹本(歌舞伎義太夫)の最長老でありました。

■鶴澤 三生師 (昭和59年9月29日逝去)  
32号の編集集中に、悲しいニュースが入ってしまいました。女流三味線の第一人者であった鶴澤三生師が、一年余の闘病の後、ついに力尽き、帰らぬ人となりました。弟子というものは一人もとりませんでした。お元気な頃には、ベテランから若手までが、こぞって三生師の指導を仰いだものでした。重要無形文化財・義太夫節保存会の理事として、伝統の継承に最も尽くされた功労者であります。九月三十日のお通夜、十月一日の告別式、いづれも伊勢原市の長龍寺で営まれました。遠路にもかかわらず、義太夫関係者が続々と訪れ、文化庁長官はじめ各界からの弔電、国立劇場、文楽関係、協会関係の方よりの生花で埋まりました。心から故人を偲んで参列した人々で、涙を流しながら最後のお見送りをしたことでした。

御冥福を心からお祈り申し上げます。

編集後記

義太夫節三百年に関する記事の多い中、三生師の訃報が何とも悲しく残念です。このあと、編集部は、記念公演プログラムの準備に入りますが、公演部はじめ正会員は、すべて三百年記念に向けて邁進です。どうかよろしくお願ひいたします。

(訂正) 会報31号の発行日は6月20日でした。